岬の幼稚園

――十人の子どもたちといっしょに――

牧野静子

私は街の、みやとり幼稚園から転勤して僻地の平久保幼稚園に初めての出勤のため、いろいろと思いをこめて石垣市内のバスターミナルから平野線のバスに乗って、片道一時間半もかかる石垣島の最北端平久保へと向った。

約一時間してバスは伊原間半島にはいった。先に遠望した山々が、今度はすぐ目の前に立ちふさがって見えた。樹木一本もない青草でおおわれた山々は、そして丸味を帯びた山容は、緑のベルベットをかぶせたように青草にいろどられていた。緑のカーペットをひろげた美しさだった。金山牧場で麓に境界の石垣がめぐらされている。山腹には、まだらな筋が、幾重にも重なりあっている。放牧の牛が、この山を上下するために自然にできた道だという。

久字良（くうら）・吉野の両部落を過ぎ、この半島の中心地、平久保（ひらくぼ）にさしかかった。右側の車窓から平久保小学校が見えた。緑の山を背に、平地の中にこじんまり立っていた。この小学校は、石垣島最北端の学校で、今でこそ、バスが通っているが、それ以前は裏石垣の開拓入植村と等しく最悪の条件に置かれた学校であった。平久保部落は、東に平久保岳がそびえ、西は大平洋とも東支那海とも見境のつかぬ青い海に滑り落ちる海のひろがりが青天に限りなく続き雄大な景観である。南と北は平原で沃野沃田をもっている。五百年前（文明年間）平久保加那

という豪力の酋長がいて支配していたという古い部落である。

戦前は、僅か七戸で昼なお暗い雑木林の下で、さびしく暮していたが、戦後マラリヤ撲滅作業で雑木は伐採され、宮古島から移住するものがあった。更に一九五六年四月三〇戸一五一人が政府計画移民として入植し、旧部落民とともに村造りに努め、学校を創造し農業に精励した。南に久字良部落、北に平野部落が出来て児童数も増え、平久保小学校が近代的な建物に拡充され、幼稚園も開設され平久保は活気に満ちた農村として発展した。

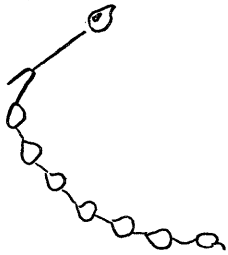
しかし過疎化の波はこの地に及び、現在三十四戸一七三人が住んでいる。平久保小学校は在籍三十三名で幼稚園児数在籍十名で混合保育である。幼稚園が創立して五か年で平野・吉野・久字良・明石と四つの部落からバス通勤で、十年前ほどは、小学生全児童は遠距離を歩いて通学した状態であった。

現在は小学校のもと給食室を改造して保育しています。去年十六名の園児でしたが過疎地で久字良部落にも全く園児も減り今年は十名の在籍で皆子どもたちは素直で明るくすくすくと伸びています。夏の水あそびには、青くひろびろとした美しい海でのびのびとしてあそぶこともでき、緑の芝生の上でねころび楽しくそして自然に恵まれた環境の中で丈夫な体をつくり保育されています。

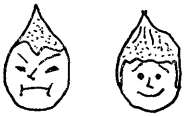
子どものあそびとして季節にいろいろな草木のもので、いろいろな形のものを工夫して作ることも出来るし、砂浜にあるいろいろな種類の貝や小石で面白く工夫して作ることができます。沖縄の春は日本中でいちばん早くやってきます。砂糖キビの収穫がすむ三月中旬になると、木の芽はいっせいにもえ出て、一面に広くひらけた畑にチョウチョウが乱舞しはじめます。この季節は子どもたちも疲れを知

ジュズダマの首飾り

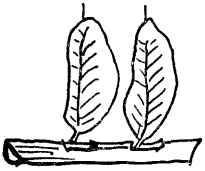
ジュズダマは女の子の友だちだ。ジュズだまの根・茎・葉をきざんで蔭ぼしにし，煎じて飲みます。サメハダをなおすといわれています。



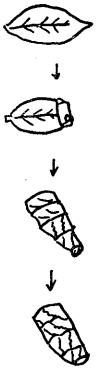
ソテツの実細工



帆

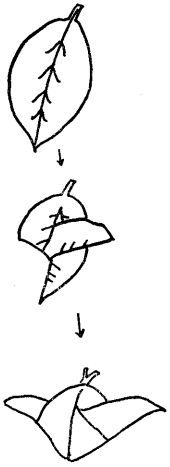


ふえ



軽くかみつぶして吹く

ちょうちょう



らず走りはじめる季節なのです。この季節のクロトンの葉、ガジュマル、ホルトの木の葉で美しいチョウチョウがつくれます。

民話　平久保大鳥

八重山島、石垣平久保崎の大石島と与那国の東(あがり)美崎に毎年秋の季節になると大きな海鳥が飛んできて卵を生み雛をやしないます。このひなは丁度鶩に似て翼の長さは九尺ばかりありますが、この大鳥の名を知っている人はいないのでただ平久保大鳥とよんでいました。この海鳥は春の暮になると小ひなをつれて何処となく飛んで行きます。面白いことに、この鳥はときどき山や野へもとんで来て、一ところに集まり輪の形に陣をつくり、そのうち一羽がまんなかに立ち、残りがとりまいて仲間といっしょに翼をうっておどります。

平野

平野部落は平久保半島の北端部に平久保牧場の一部を開

放して一九五七年五月宮古・沖縄本島地区より六十戸八十名（先遣隊）が入植して創設された部落である。平野には、平久保灯台、平久保牧場があり釣りや潮干狩りを楽しむ人も多くなっている。小学校や幼稚園にも通学しています。

明石

明石部落は琉球政府の移住開発計画により、伊原間牧場の一部を縮少して、一九五五年四月沖縄本島から六三戸三四九人が入植した部落である。地味肥沃でパインアップル、キビ、畜産等に励んでいるが過疎化は免れず現在四〇戸二〇〇人に減っている。明石小学校は伊原間・明石含めて在籍三十五名で平久保小学校と同じ数である。明石の海岸は砂浜が美しく海水浴に適し海底の砂もすきとおるほどきれいにすんで釣りや潮干狩りに最適である。

平久保崎　＝アイナ（方言で花嫁のこと）―石の伝説＝

現在の石垣島は、バス、タクシー、レンタカーのほか、ここ二、三年来、急激に増え出した自家用車なども加わって、島のいずこへ行くにしても、いささかの不便も感じなくなった。ところがその昔は、島の裏地区は、〝僻遠の地〟として知られていた。とくに島の北部に突き出している平久保半島の先端に位置する平久保（現在の平野部落）は、〝地の果て〟ともいうべき土地としておそれられていた。いまでも島の年寄りたちは、俗に死ぬことを「ペーブグ（平久保）に行く」という表現を使う。こうしたいいまわしでもわかるように、昔は、平久保はあの世の同義語に用いられていたようである。その平久保にまつわる悲しい伝説としてつぎのようなものが残されている。

その昔、川平村の娘が平久保村の青年のところへ嫁いでいくことになった。当時は、親のとりきめたとおりに結婚するのがならわしで、この場合も例外ではなかった。もちろん、相手の男性がどんな人物であるかということは、知るよしもなかった。いよいよこし入れの日となり、花嫁は泣く泣く生れ村の川平をあとに、つきそいの人たちといっしょに山野を越えて平久保の婿のところへ向っていった。しかし、いくほどに心は重く、悲しみはつのるばかり。やがて舟越をすぎ、伊原間を越えて、平久保村の手前にある

久字良の坂にさしかかったとき、花嫁は、「小用がしたい」といい出し、ひとり山林の中へはいった。つきそいの人たちは待ったが、花嫁はいっこうにもどる気配がない。不審に思ってさがして見ると、不思議なことに、その花嫁は小用するポーズのままで石になっていたという。この石は、その伝説によって、〝アイナー（花嫁）石〟と呼ばれている——。

かつて〝あの世〟と同義語に使われた平久保もいまでは、バスが毎日運行するようになり、石垣の中心地とも近くなった。一九六五年（昭和四十年）に点灯された平久保崎灯台は、石垣島の最北端に立っている。そこは昔、村と村、島と島との通信に烽火（のろし）をたいた平久保崎火番むるの跡だといわれる。そこからは、川平はもとより晴れた日には、遠く宮古の多良間島も望見できる。琉球に初めて烽火の制度が設けられたのが、いまから三〇〇余年前の一六四四年（尚賢五四年）の時だと史書にあり、沖縄本島のほか、諸離島にも、烽火をたく処（火番むる）は置れた。石垣島には平久保のほかに、川平獅子むる桃里からだきの三ケ所があった。

さて、平久保崎は、石垣島の中でも眺望絶佳の地として知られているが、島の一周道路も整備され、また一日数回ではあるがバスも通うようになった現在では、島の欠かせぬ観光地となり、訪れる人は多い。灼熱の太陽とその下でのんびりと牧草を食む七〇〇余頭の牛の群れ、白雲の去来する高い青空とゆるやかな緑の曲線美を見せる丘陵、真白い砂浜と七色の色彩を放つサンゴ礁の海、重なる山々——これらで形成される平久保崎の自然美を眺めつつこの二か年間毎日保育に通勤する私も朝は爽やかな空気とそして太陽を目の前に、帰りは西に真赤に沈む夕日を眺めつつ往復三時間のバスにゆられながら十名の可愛いい子どもたちと楽しく毎日の保育に頑張っています。

（沖縄・石垣市立平久保幼稚園）

本誌定価改訂のおしらせ

諸経費値上りのため、誠に不本意でございますが、本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。なにとぞご諒承下さいますようお願い致します。

記

「幼児の教育」　一部定価二五〇円
（昭和五十四年一月号より）　以上

昭和五十三年十二月

株式会社フレーベル館

読者各位